

吉祥寺東町1丁目市有地利活用検討委員会
参考施設見学 報告書

1 日時

令和2年1月21日（火） 9時30分～12時

2 参加者

<委員>

栗田委員長、青木茂委員、青木一郎委員、栃折委員、中村委員、森安委員

<事務局>

資産活用課 小内課長、丸山主査、監物主任、永坂（記録者）

3 見学施設

①ナースステーションたんぽぽ

②テンミリオンハウス花時計

4 見学報告

①ナースステーションたんぽぽ

<施設概要>

- ・訪問看護事業を母体に、いきいきサロン事業や地域の気軽な健康相談（粋なまちかど保健室）を実施している。
- ・運営者の丹内氏は、関前のカンタキ「ナースケアたんぽぽ」の千葉看護師の元で訪問看護に従事されていた。
- ・1Fがいきいきサロン事業や相談事業のスペース、2Fがスタッフの事務所となっている。



<ヒアリング内容>

- ・施設全体を訪問看護ステーションとして届け出ている。
- ・スタッフは、70名程の利用者に対し、看護師5名、リハビリスタッフ2名、事務員2名となっている。事務員には1Fでの事業にはボランティアとして参加してもらっている。
- ・介護だけでなく、精神や難病の方の訪問もある。割合は半々くらい。
- ・保健室は送迎がないため、足腰がしっかりしていないと来られない。元気なときからの健康づくりが一つのテーマになるので、R2年度からは働く人たちも視野に、土日や夜の開催も検討している。
- ・ここ2～3年は訪問看護が忙しくてあまり保健室の活動ができなかったが、8月に訪問看護ステーションの管理者を新たに設置し、月～金の活動を目指したいと思っている。
- ・保健室は70代前半くらいの利用者が多い。
- ・保健室は収益がない。訪問看護以外の収入は、いきいきサロンの助成金や利用料、丹内氏の講演料など。いきいきサロンの利用料は現状年100円としているが、次年度は1回100円にする予定。
- ・保健室は採算が取れないため、訪問看護が順調でないと成り立たない。R2年度は保健室事業に注力するために訪問看護のスタッフを新たに雇うため、かなり厳しくなる見込み。丹内氏自らの給与を下げ対応する。
- ・利用者は市内が多いが、他には西東京、小金井、三鷹（上連雀）などから来ている。
- ・半径2キロくらいの範囲を訪問している。効率よく回りたいため、団地の近くなどが望ましい。
- ・保健室を始めた理由は、訪問看護だと状態が悪くなってからでないと出会うことができず、そうなる前に気軽に相談できる場所の必要性を感じたため。当時はまだ自宅での看取りという考え方が浸透しておらず、病院で死を迎えるのが当たり前だった。納得できる最期を迎えるためには、看護師が頑張るのではなく、地域の人たちが賢くならないといけないと感じた。
- ・ふらっと気軽に立ち寄れることで、介護保険のサービスにうまく乗れない精神や難病の方が、必要な支援にたどり着くためのサポートにつなげられる。
- ・地域のボランティア、専門職（管理栄養士、看護師、医師など）のボランティアに支えられている。制度に乗っていないので自由がきくが、その分悩むことも多い。やりたいことはたくさんあるが、それが制度や社会の中でどう位置づけられるか。
- ・機能強化型訪問看護ステーションとして登録できれば管理料の設定が上乗せされる。地域貢献事業を行うことが要件になるので、そこに保健室を位置付ければ経営が楽になるのではと思っている。
- ・独居の高齢者は非常に多い。独居であっても、本人が支援を受け入れられれば自宅で最期を迎えることはできる。そのためにも、元気なときからつながりを作っておくことが必要。
- ・たとえ病気であっても、その人なりの健康を維持増進していくことが大切。そのサポートには、その人の暮らしや介護の状況が分かる訪問看護師が適任だと考える。
- ・相談に訪れる人は、いきいきサロン利用者、訪問看護利用者の家族、新規の人など様々。いきいきサロンとは時間をずらして来ることが多い。
- ・利用者同士で情報交換をする場面もある。こちらがあれこれ指導するというのではなく、利用者自ら情報を探し、看護師がサポートするのが望ましいと考えている。

- ・ここは解決のための場ではなく、ハブ機能として必要な支援に丁寧につなぐことを心掛けている。
- ・訪問看護事業は医療法人よりも株式会社や有限会社が伸びている。リスクはあるが、会社の事業とした方が自由にやりたいことができる。一方で、保健室自体は営利目的でないものの、株式会社という立場上コミセンの協力を得ることが難しい。地域とのつながりをどう作っていくかが課題となる。

<考察>

- ・保健室は収益性がないが、自らの給与を下げてでも地域の人々の健康を支えたいという運営者の強い信念を感じた。
- ・地域のための自主事業を展開しやすいよう、しがらみのある医療法人ではなく株式会社としたことで、かつて地域の窓口であるコミセンとの協力関係づくりが困難になっている。コミセンとしては事業の内容ではなく事業主体によって評価せざるを得ないところがあると思うが、双方のニーズは合うのにうまくマッチングしない点がもどかしい。

②テンミリオンハウス花時計

<施設概要>

- ・2階に親子広場（るーぷる）が併設されたテンミリオンハウスで、高齢者と親子のランチ交流が行われている。
- ・常時ではないが、小学生向けのお琴や茶道の講座、学習支援を目的とした「こどもの広場」が実施されている。



<ヒアリング内容>

- ・親子のランチは1日6組としているが、高齢者の予約が少なければ追加で受け入れている。
- ・高齢者は基本的に洋室で椅子に座って食事をとるが、グループで来るママには掘りごたつの和室が人気。部屋は分かれるが、高齢者が帰る様子を窓から見て手を振るなど、交流はある。
- ・最近は職場に復帰するお母さんが多く、最初からママ友同士で訪れる人は少ない。広場に来てお友達になる。

- ・親子ひろばのスタッフは1名。初めての方が来たときにお話をしたりや子どもの遊び相手をしている。
- ・地域のイベントに参加したとき、学童を出た小学生の居場所がないという話があり、毎日ではないが小学生向けの学習支援の場を設けている。利用者は10名程だが、来る日もあれば来ない日もある。学校でチラシを配ってもらったが、支援を必要とする子を見つけ出すのが難しい。
- ・小学生向けにお琴や茶道の講座もやっているが、高学年になると塾が忙しくなるのでやめるパターンが多い。
- ・学習支援とはいっても、同じ施設で高齢者が趣味の講座をやっていたり、乳幼児が遊んでいたりするので自由な雰囲気がある。高齢者が絵手紙を描いているところを小学生がのぞきにくる場面もある。
- ・親子ひろばに来ていた乳幼児が小学生になって引き続きお琴教室に来るようになったり、お母さんがスタッフをやってくれたり、継続して関わってくれる人もいる。
- ・かつてここを利用していたママ友グループが、この場所で年に1回同窓会をやっている。長野や松戸など遠方に引っ越したお母さんも来る。
- ・近隣からは理解を得られており、騒音の苦情は今までない。
- ・働いていたお母さんはママ友が作りづらいいということもあり、花時計に来るようになってから、ほとんど毎日利用する方もいる。
- ・一時預かりは制度が違うので、主な対象を高齢者としたテンミ事業の枠では難しい。ご要望があったときはひまわりママを紹介するなどしている。
- ・高齢者の登録数は221名（12月時点）。1日20人くらいの利用があり、1割ほどが男性。麻雀の日は男性の利用が増える。
- ・大学生ボランティアに事業をやってもらうこともある。ICUや獣医大のコーラスサークル、亜細亜大の吹奏楽サークルなど。コミセンやボラセン、健康づくり支援センターなどにお手伝いをお願いすることもある。
- ・お誕生日メニューでお赤飯を出す日がある。食事はその日来た全員が同じメニューだが、お誕生月の方はハッピーバースデーを歌って写真を撮る。
- ・スタッフは10名おり、うち2名が調理スタッフ。親子ひろば利用者だったママが調理スタッフをやっている。

<考察>

- ・親子と高齢者の交流を強要されない雰囲気があるので、双方が居心地よく過ごせる場となっている。
- ・乳幼児のひろばだけでなく、小学生になっても来られる場があることで、親も含めて関係が途切れず、愛着を持たれる施設となっている。
- ・食事場所が和室と洋室を選べるので、長時間椅子に座ってられない幼児でも、床に座るのが難しい高齢者でも食事を楽しめる。室は分かれるものの完全に仕切られていないので、お互いの雰囲気が感じられる。